



TITLE:

<大會抄録>「地方史・誌」にみる  
國民國家イランにおける中央・地  
方關係：アゼルバイジャンの事例を  
中心に

AUTHOR(S):

八尾師, 誠

---

CITATION:

八尾師, 誠. <大會抄録>「地方史・誌」にみる國民國家イランにおける  
中央・地方關係：アゼルバイジャンの事例を中心に. 東洋史研究 1996,  
55(3): 629-629

ISSUE DATE:

1996-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155012>

RIGHT:

らY・ラーギブがかつて指摘していたのみで、管見の限りまったく他研究に言及されていない。報告では本寫本に他史料を併せて考察し、同期における死者の街参詣の在り方、そして死者の街自體の研究序説としたい。

### 「地方史・誌」にみる國民國家イラン における中央・地方關係

——アゼルバイジャンの事例を中心に——

八尾 師 誠

中東地域の近現代史にとって基本的問題のひとつに國民國家の形成と發展がある。イランの場合も例外ではない。一九世紀以來、好むと好まざるとに拘らず、國民國家への道に足を踏み入れたイランは二〇世紀初頭に經驗する「立憲革命」を機に、明確に國民國家としての自己主張を始める。以後、一貫して中央集權化政策がとられ、國民經濟の形成と發展がはかられ、國家（國民）統合が推し進められてきた。一九二五年に成立したパフラヴィー王朝體制下にあつても、一九七九年に誕生したイスラーム共和國政權下にあつても、この基本的方向性は變わっていない。

その結果、それまでは政治的・經濟的・社會的・文化的に一定の獨自性と自立性を保持してきたイラン・ザミーンの各地域が、テヘランという「中央」に對する「地方」として位置附けられ、「中央」によつて統合され、支配される對象に組み込まれることとなつた。

そこに生まれた「中央・地方」關係の諸相を、「地方史・誌」を史料（資料）に検討することが今回のねらいである。方法的には、出版狀況（出版年、出版地、出版主體など）や各「地方史・誌」がどのような範圍を「地方」として設定しているか、といったいわゆる外在的分析と、内容そのものに關わる内在的分析があるが、今回は、アゼルバイジャンを具體的事例として、特に外在的分析を中心に豫備的考察を行なうつもりである。

### 宋代における祠廟と社

——その性格をめぐる議論と史料の再検討——

松 本 浩 一

宋代は社や祠廟信仰の歴史においても大きな轉換點とされ、從來から様々な變化が指摘されてきている。たとえば傳統的な里社とは異質とされる祠廟が、特に江南の地域において簇生し、その祭祀組織も新しいタイプのものが現れたことなどである。しかしこの時代の社あるいは新しくあらわれた祠廟信仰が、どのような組織を備え、どのような活動を行っていたのか、またいわゆる傳統的な社の信仰とは、どのような點で異なっていたのかについて、具體的なイメージは描かれてこない。

この時代の史料において、社という言葉で表現される對象は様々であり、宗教的なものだけに限定してみても、あるいは神を祀つた施設であつたり、そこで行われる祭祀活動であつたり、祭祀に關わ